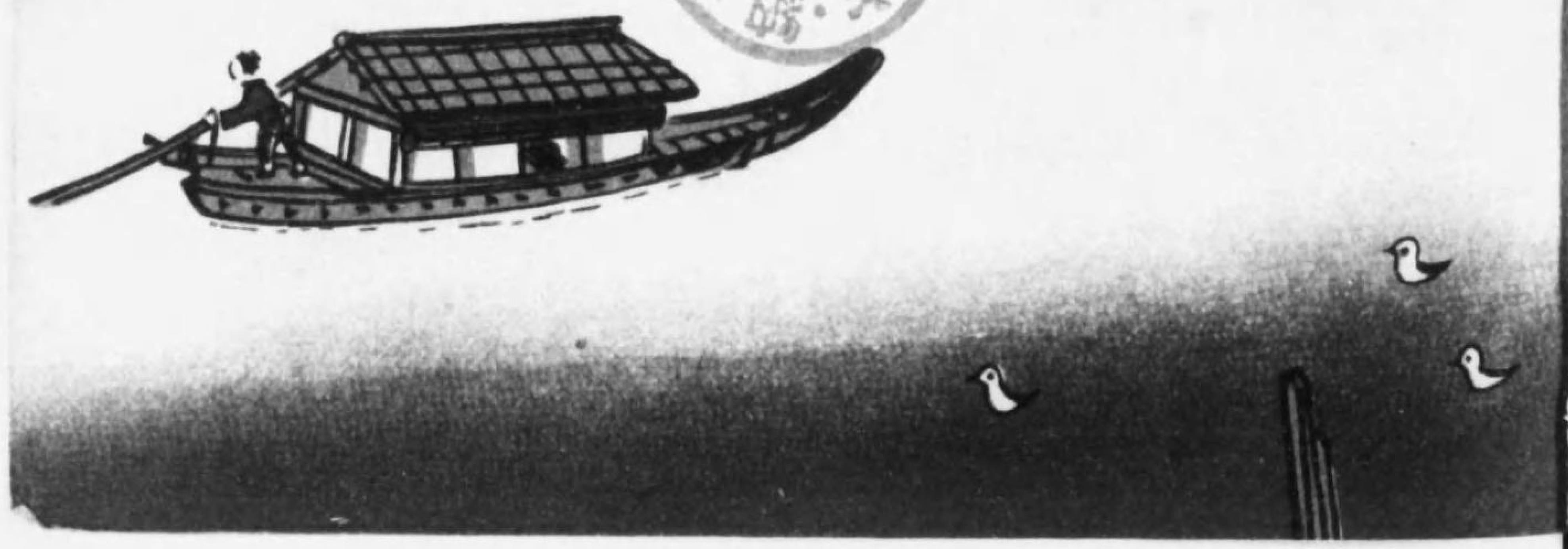
端唄小唄 特選集

特 260
590

始

特260
590

端唄小唄 特選集



はしがき

小唄、端唄、哥澤等は、歌詞の上からの限界がはつきりしてをらぬやうでありますが、何れも、都々逸節、よしこの節、大津絵節等々と、其の源を同じうしてをるやうで、それが、歌詞に於て曲調に於て、近世から江戸末期この方、洗練に洗練を累ねて、其の即興的風韻と、小品的情緒は、吾等の有する唯一の民衆詩として、平俗高潔な歌詞の裡に無限の情感を籠め浅酌低唱すれば優婉の情趣自ら湧き、加ふるに三絃技巧の藝術味―粋さと、渋さと、枯淡な味とは、純粋日本音楽の精髄であります。然しながら、酒席などで、即興的に作られ歌はれたものが、口から口へ、手から手へ移されたもの、中には、考證や文献にも諸説があつて、定本といふものがありませんから、歌詞に異説あるものもかなり有りまして、各派によつても、多少の相違が免れぬところであります。

今の世相は、舊い衣を脱いで新しい衣を装ふに慌しく、凡ての生活様式が推移の状態を急ぎつゝありまして、古来の國民的習俗も、娯楽も、趣味も、好尚も只管に華らしきものに向つて趨らんとするの時、獨り我が小唄ぶり、端唄趣味のみが、依然として傳統に終始して其の真骨頂を失はぬことは、聊か意を強うするに足るものがあります。

第一第二の各名盤集は日本趣味好尚者の間に喜ばれ、續いて第三集發行の慫慂切なるものがありますので、今回は殊に小唄の妙趣あるものを更らに最近頭に勃興した舞踊用をも参酌して一般嗜好者の要望に適合する点に苦心を拂つて撰曲輯集した所に特長があります。世の通人粋客は元より舞踊家、舞踊研究家にはなくてはならぬものゝ一つであります。

昭和己卯五月

編者識す

二三吉端唄小唄名盤集（目次）

涙かくして 一
ぞめき 一
川風 二
都鳥 二
つがひ離れぬ 三
與作おもへば 三
室や久しく 四
待ちわびてねる 四
浙よくも 五
水の出花 五
船に船頭 六
話しらけて 六
ぬれてしつぽり 七
からくり 七
みなこゝに 八
西行さん 八
辰巳やよいとこ 九
ぶらり 九
山谷の小舟 九
柳橋から 一〇
ほんのりと 一〇
一ト聲は 一一
野暮な屋敷 一一

晩に思ばゝ 一二
張り子の寅 一二
出の音 一三
秋の野に出て 一三
いつしかに 一四
喜撰な首尾 一四
われがすみ家 一五
主手を適るは 一五
わしが思ひ 一六
葉桜 一六
小諸出て見よ 一七
上り下り 一七
はでな由良さん 一八
屋台ばやし 一八
三つの車 一九
網は上意 二〇
淀の川瀬 二二
をしどり 二三
腹のたつとき（長唄） 二三
止めては見たが 二四
お伊勢諸り（長唄） 二四

小唄 涙かくして（二上り）

へ涙かくして送り出す、二階廊下で見送れば、一足づゝにとほざかる、エゝもぢれつたいまがり角ソレ〳〵さうぢやいな。

小唄 ぞめき（二上り）

佐藤惣之助 詞

へぞめきにごんせ浪花津へ飛騨の工みぢやあるまいし、きざんでのよしあし見んでかへる。

小唄 川風（本調子）

〽川風に、つひさそはれて、涼み船、もんくもどうかくぜつして粋なすだれの風の音に、漏れてきこゆる爪びきの、いきな世界に照る月の、中を流るゝ墨田川。

小唄 都鳥（本調子）

〽都鳥、ながれによどむ燈籠の、よる〳〵風に佃ぶし、なみの早瀬の、みづ清くこゝろ墨田のかぢまくら。

小唄 つがひ離れぬ（二上り）

〽つがひはなれぬ、をしどりも、ちよッと古いじやないかいな、春は花、秋の月ほどまんまるな、あだな浮世にすみだ川、よいのさ〳〵、あだな〳〵うき世にすみだ川。

小唄 與作おもへば（二上り）

〽與作おもへば、照る日もくもる、はい〳〵どう〳〵はい〳〵関の小萬が涙の雨よ、ほと〳〵ぎす、アレナほぞんかけたか、〳〵そちや二世かけたえ。

小唄 空や久しく（本調子）

〽空や久しくもらるゝ、降らるゝ雨も晴れやらぬ、濡れて色ます青柳の、糸のもつれが氣にかゝる。

小唄 待ちわびてねる（本調子）

〽待ちわびて、寝るともなしにまどろみし、枕にかよふ鐘の音も夢か現か、うつゝかゆめか、覺めてなみだのそでたもと、あれ村雨がふるわいな。

小唄 折よくも（本調子）

〽をりよくもねぬ夜すがらや、ほとゝぎす、雨戸にさッとふりかゝる、たれやらかどれおとづれの、顔にてりそふ初螢。

小唄 水の出花（本調子）

〽水の出ばなと二人が仲は、せかれあはれぬ身の因果、たとへどなたの意見でも、思ひおもひきる氣は更にない。

小唄　船に船頭（本調子）

〽船にせんどうさゝやいて、今朝の出しほに首つたけ、惚れて通へば千里も一里ぢやえ。

小唄　話しらけて（本調子）

〽話しらけて、ついつくねんと、明けて口説の夏の月、涙でしめる白粉の、あれまた啼くかほとゝぎす。

小唄　ぬれて志っぽり（本調子）

〽ぬれて志っぽり、打解け顔に、ふけた世帯をしみぐ〜と、可愛い憎らしい痴ごとな、夢に結びしつがひの蝶々、すゑの末まで二人連れぢやわいな、そしらばそしれどうなと勝手に、こちは何んでもかんでも、なんでもかまやせぬ。

小唄　からくり（本調子）

〽からくりの、ぱっとかはりしお前のこゝろ、かげで糸ひく人がある。

小唄 みなこゝに（本調子）

〽みなこゝに、三つの鱗と名も高時が、うかれ天狗の酒盛に、祇園豆腐の田楽舞は、さすが日本にたぐひなき。

小唄 西行さん（本調子）

〽西行さん、はじめて東へ下る時、墨の衣に竹のつゑ、唐茄ほどのたゝきがね、チキチヤンチキ、チキ／＼南無阿弥陀。

小唄 辰巳やよいとこ（三下り）

〽辰巳やよいとこ、素足が歩く、羽織やおえどのほこりもの、八幡がねがなるわいな。

小唄 ぶらり（本調子）

〽ぶらりとしてはゐれども瓢箪は、〽うけて丸く世間をわたる、身は店借の氣さんじは、月雪花のさゝきげん、内で楽しみそしてまた、胸すはちやんとしめくゝり。

小唄 山谷の小舟（本調子）

〽山谷の小舟、着いた着いたオゝついた待乳山風、手ぬぐひでしのぐ、雨かみぞれか、まゝよ／＼今夜もあしたの晩も、ゐつゞけせう、生薑酒。

小唄　柳橋から（本調子）

〽柳橋から小船でいそがせ、山谷堀、土堤の夜かぜが、ぞつと身にしむ衣紋坂、君をおもへば逢はぬ昔がましぞかし、どうして今日はござんした、そういふ初音を聞きにきた。

小唄　ほんのりと（本調子）

〽ほんのりと、明けてもくらき朝霧や、島かくれ行く捨小舟、たれにこがれてゐるじややら。

小唄　一と聲は（本調子）

〽ひと聲は、月が啼いたかほとゝぎす、いつしかしらむ短夜に、まだ寝もやらぬ手枕や、男ごゝろはむごらしい、女心はさうじやない、かたときも逢はねば、くよ〳〵と愚痴なやうだが、泣いて居るわいな。

小唄　野暮な屋敷（本調子）

〽野暮な屋敷の大小すてゝ、腰も身軽な、まち住居、よい〳〵よいよいやさ。

小唄　晩に忍ばゝ（二上り）

〽晩に忍ばゝせどやの小窓、こうつや砧のうき格子、様はきゝたかと窓から見ればさまはさまぢやがお月さま、しよんがえ。

小唄　張り子の寅（二上り）

〽いくらくどいても、張り子の寅は、すました顔志て首を振る、なれどその日〳〵の風次第。

小唄　虫の音

〽虫の音を、とめてうれしき庭づたひ、あくる柴折戸桐一葉、エヽにくらしい秋の空、月はしよんぼり、くもがくれ。

端唄　秋の野に出て（二上り）

〽秋の野に出て七草見れば、サアヤレ、露で小褄がみな濡れる、サアよしてくんな鬼薊。

小唄 いつしかに（本調子）

〽いつしかに、緣は深川なれそめて、せけば逢ひたしあひ〳〵ばまた、浮名立つかや遣瀬なや、これが苦界ぢやないかいな、とかく浮世は色と酒、うきなたつともまゝのかは、浮いた世界ぢやないかいな。

小唄 無理な首尾（本調子）

〽無理な首尾して出先から、用事をつけて逢ふ夜さは、まくらもぢやまと引きよせて、顏につめたき前髮の、月ぢやござぜえせんしら〳〵と明烏。

小唄 われ〳〵がすみ家（三下り）

〽われ〳〵が住家は、かく〳〵れざと、猫が三味ひく鼠がうたふ小うたの面白や、これを思へば、やつこらさ、浮氣おもはく笹舟にのせて、舵をまくらに寢てこがりよ、しよんがえ。

小唄 土手を通るは（三下り）

〽土手を通るは、もし〳〵やあの人ぢやないかいな、いや〳〵ちがうた、洗濯の日、あひ傘でしつぽりと、アレ春雨がふるわいな、ぬれかゝる、エーさりとは氣みぢかな、ちよつと〳〵あうてもゆかしやんせ。

小唄 わしが思ひ（三下り）

〽わしが思ひは三國一の、ふじの御山の白ゆき
つもりやするともとけはせぬ、浮名たつかや
たつかや浮名、あんなお方といはんすけれど、
人の心はあひ縁奇縁、ほんにからだもやる気
にわしやなつたわいな。

小唄 葉櫻（三下り）

〽葉櫻や、月も木の間をちら〳〵と、たく
水鷄にさそはれて、さゝやく聲や苫の船。

小唄 小諸出て見よ（本調子）

〽小諸出て見よ淺間の山で、けさもけむりが
三すぢ立つ、やれよいさ、よんやさ。

端唄 上り下り（本調子）

〽のぼり下りのおつゞら馬よ、さても見事
な手綱染めかいな、馬子衆の癖か、高聲
で、筋をたよりに小室節。

小唄 はでな由良さん（三下り）

〽はでな由良さん、手のなる方へ、とらまく
てさゝにしようし、藝子や、おやまに
手をとられ、思はず彌五郎に抱きつき、
テモ粗そうな由良さんぢや。

小唄 屋台ばやし（三下り）

〽屋台ばやしのうちこみは、先づ神樂ばやし、
聖天鐘倉、おほましやうでん、あとは早目
で、てんすてゝてん、すとどん／＼、おひやりひ
やり、とろいやいとろ笛の聲、さゝきゝ奏ぢや、
ともに打の込、チャエンチエチエチチあたり鉦。

小唄 三つの車（二上り）

〽三つの車に法の道、火宅の門や出ぬらん、そら
出た、生靈なんぞは、おほこはや、身の憂き
に人のうらみはなんのその、わたしの思ひは
こはいぞよ、なぞと消息所が、おつうすまし
て、御能がゝりで、おつしやいましたとサ、ノ
ウマクサンマンダ、バサランダで、ヤンレ身を焦が
したとサ、エヽ悋氣に金貸しや、罪なもの。

端唄　綱は上意（本調子）

〽綱は上意を蒙りて、羅生門まで着きにける、折しも雨風はげしき夜より、かぶとの錣を引掴み、引きもどさんとエイと曳く、綱も聞えしつはものまで、かの曲者に諸手をかけ、〽よしやれ、放しやれしころが切れる。

しころ切れるはいとひはせぬが、たつた今ゆうた鬢の毛が、損じるはもつれるは、七ッ過にはゆかねばならぬ、そこを行かんすがこちや氣にかゝる、誰れぢや／＼鬼ぢやないもの人ぢやもの、兜もしころもなッちもいらねえ、サッサもつてけ、しよッてけ。

端唄 淀の川瀬（二上り）

〽淀の川瀬のナアー、景色をこゝに、引いて上るヤンレ三十石ぶね、清き流れをくむ水車、めぐる間ごとはみな水馴竿さいたさかづき、おさえてすけりや、酔うて伏見へ〳〵だまきづなよ、かうしたところが千両松、ヨイ〳〵〳〵、ヨイ〳〵〳〵さ。

小唄 をしどり（本調子）

〽鴛鴦の、飛び立つほどに、おも〳〵ども、飛ばれぬつらさ待ちわびて、無理にあはせた畳算、忘れて迷うて忘れて煙管に、、歯のあとが、一夜あけの星の、二つ三つ四つ

小唄 腹のたつとき替唄（本調子）

〽くどいようだがあの人ばかり、思ひ切れぬ、切れぬ筈だよ、命をかけて、出来たる二人が仲じやもの、オットあなたに話すぢやなかつた。

小唄 止めては見たが（本調子）

〽止めては見たが、利かぬ氣の、歸りたいなら
か〜らんせ、空はおぼろの薄ぐもり、はるや
昔の春ならぬ、月のないのに花のかげ、色
は見えねど香は移るその香につひうッとり
と、マア静かな晩だこと。

小唄 お伊勢詣り替唄（本調子）

〽雪の朝の入谷の寮であったとさ、可愛い直
はんの膝にもたれて泣いたとさ、風に鳴る子
の音高く。

附録 端唄小唄百選集 目次

（イの部）
湖來出島 一
色氣ないとて 一
色がある 二
（ハの部）
春雨 二
晴れて雲間 三
はでな由良さん 三
初出見よとて 四
初春 四
荻桔梗 五
はるばると 五
羽織かくして 六
葉ざくらや 六
腹の立つとき 七
春風が（そよ〳〵） 七
話しらけて 八
初雪に 八
梅本 九
（ニの部）
二上り新内 九
（ホの部）
惚れて通ふ 一〇
ほとゝぎす（自由自在） 一〇
ほとゝぎす（今一聲） 一一
ほれさせて 一一
（トの部）
責めてもかへる 一一
どうぞかなへて 一二
（リの部）
悋氣らしい 一二
（ヌの部）
主さんと 一三
（オの部）
降りて行く 一三
大津繪 一四
お互に 一四
お前と一生 一五
男がようて 一五
お伊勢詣り 一五
お伊勢詣り（替唄） 一六
（ワの部）
わしが在所 一六

我 し がが 物 一六
わ が 圃 さ 一七
我 思 ひ 一七
我 がが 哀 は 一八

（カの部）

書 き 送 る 一九
か ら か く り 一九
か ら さ 二〇
桂 て 手 川 二〇
莖 ね 管 二〇
肩 車 二一
重 ね 扇 二一
川 晏 竹 二二
蝸 幅 二二
海 の 寺 二三
香 水 二四
籠 鳥 二四

（ヨの部）

よ り を 戻 し て 二五
夜 の 雨 二五
夜 の 梯 二六
宵 の 川 ま ち 二六
淀 の に 瀬 二七

（夕の部）

手 枕 や 二七

葛 に な り た 砂 二八
艸 や 二八
玉 巳 や に よ い と 川 二九
竹 山 雀 二九
辰 こ 三〇
館 節 三〇

（ソの部）

空 ほ や の 久 く 三〇
空 晴 し き 三一

（ツの部）

網 は 上 煮 三一
辻 は 君 三二
露 は さ 中 尾 れ 花 三二
月 ど 三二

（ネの部）

寝 な が ら に 三三

（ナの部）

涙 か く し て 三三

（ムの部）

む つ 理 と な し 首 尾 三四
無 て 三四

（ウの部）

字 茶 三五
浮 名 主 活 て じ と 三五
薄 墨 三六

浮 世 は な こ れ て 三六
う そ と ま こ と 三七
梅 に 氣 も 同 春 三七
浮 は 匂 ひ 志 三八
梅 と せ よ 三八
梅 の せ ど れ 三八
裏 咲 い た や 三九
梅 は か 三九

（ノの部）

上 り 下 り 三九

（クの部）

雲 に か 帯 は し 四〇
口 説 し て 四〇
草 の 葉 四一

（ヤの部）

梓 な さ 屋 び 四一
野 暮 數 四一
柳 鳩 ら 四二
八 重 一 か 重 四二
や く の は 聲 着 四三

（マの部）

待 て と 云 ふ な ら 四三

（ケの部）

今 朝 の 別 れ 四三

（フの部）

筆 の 笠 四四
更 に け せ て ん 逢 夜 四四
船 ど ふ う 四五

（コの部）

心 で と め て 四五
紺 の 前 拵 四六
浦 ほ れ 所 れ 車 四六
こ し 葉 四七
恋 は 四七
今 宵 し は 雨 四七

（エの部）

縁 の い な 四八
海 老 か 子 四八

（アの部）

青 柳 四八
秋 の と 夜 四九
淡 く く も 四九
あ ご で 知 ら せ て 五〇

（サの部）

五月雨や　五〇
五月雨に　五一
揚見よとて　五一
咲いた桜　五二
薩摩サ　五三
山谷の小舟　五三
三下り　五三
さんさ時雨　五四
西行さん　五四
坂は照る〳〵　五四
酒と女　五五

（キの部）

京の四季　五六
紀伊の國　五七
君は今　五八
伽羅の薫り　五八

（ユの部）

夕暮　五九
雪のあした　五九
夕立　六〇
弓張月　六〇
雪のだるま　六〇
雪は巴　六一
雪のあした　六一
夕立　六二

（メの部）

めぐる日　六二

（ミの部）

三日月　六三
三日月（[illegible]、唄）　六三
三千歳　六三

（シの部）

志賀の唐崎　六四
忍ぶ恋路　六四

（ヒの部）

鬢ほつ　六五
びんとすねては　六五

（セの部）

せかれ〳〵て　六五

（スの部）

粋な浮世　六六
好いた同志　六六

小唄　潮来出島（本調子）

〽潮来出島の真菰のなかで菖蒲咲くとはしほらしや　よいやさ。

端唄　色氣ないとて（本調子）

〽色氣ないとて苦にせまいもの賤が伏屋も月がさす見やれ茨にも花が咲く〳〵田植戻りに袖褄引かれ、今宵逢はうと目遣に招く〳〵合圖の小諸節、すゝきに殘る露の玉かしく〳〵と讀んだが無理かいな。

端唄　色がある　（三下り）

〽色がある、承知で惚れた横恋慕云ひ出すからは飽く迄も立てゝ貰はにゃならぬぞへ。

端唄　春雨　（二上り）

〽春雨にしっぽり濡るゝ鶯の、羽風に匂ふ梅が香や花に戯れ、しほらしや、小鳥でさへも一と筋に塒定めぬ氣は一つ、わたしゃ鶯主は梅、やがて身儘氣儘になるならばサア鶯宿梅ぢゃないかいな、サアサなんでもよいわいな。

小唄　晴れて雲間　（本調子）

〽晴れて雲間にあれ月の影差し込む窓に入黒子催合枕の蚊屋の内いつか願ひもおや申し雷さんの引合せ。

端唄　はでな由良さん　（三下り）

〽はでな由良さん、手の鳴る方へ、とらまいてさゝにしよう、とらまいてさゝにしよう、藝者おやまに手をひかれ、おもはずはずれ九太夫にいだきつき、てもそさうな由良さんぢゃ。

小唄　初出見よとて（三下り）（梅見よとて替唄）

〽初出見よとて、出をかけて、先づ頭取の伊達すがた、よい道具持、意気なぽんぷ纏、エヽずんと立つたる梯子のり、後見ぢや、吹流し、さかさ大の字、ぶらり谷のぞき。

小唄　初春（本調子）

〽初春や門に松竹、伊勢海老や注連も橙、裏白の鳥追ふ声もうらゝかに、悪魔拂ひの獅子舞や、はづむ手毬の拍子よく、突く羽根ついて一イ二ウ三イ、四ツ世の中よい年と、何時も変らぬ熨斗昆布。

端唄　萩桔梗（本調子）

〽萩桔梗、なかに玉章忍ばせて月は野末に草の露、君をまつ虫、夜毎にすだく、更け行く鐘に雁の声恋はこうしたものかいな。

端唄　はるゞゝと（本調子）

〽はるゞゝと、尋ねてこゝへ紀伊の国、岸うつ浪の、みゝまで、順礼に御報謝と、かどにたつのをすがらしと、名のれぬつらさ、むせゝるなみだ、あわれ鳴戸の、うみの親。

端唄　羽織かくして　（本調子）

〽羽織かくして、袖ひきとめて、どうでもけふはゆかんすかと、いひつゝ立つて、れんじ窓、障子ほそめに引あけて、それみやしやんせ、この雪に。

端唄　葉ざくら　（本調子）

〽葉ざくらや、まどを眺むれば山ほとゝぎす、また啼くかと待つうちに、鰹〳〵とオヤいさみぢやと飛んで出る、浮氣性ではないかいな。

小唄　腹の立つとき　（本調子）

〽腹の立つときや、茶碗で飲みな、のめど、のめぬのめぬ酒なら、すけてもやろが、いやなら、醉狂な、おかしやんせ、おつとそこらがくぜつのたねとなる。

小唄　春風がそよ〳〵　（本調子）

〽春風がそよ〳〵と福は内へとこの宿へ鬼は外へと梅が香添ゆる　雨か雪か儘よ〳〵　今夜もあしたの晩も居續けしよ　玉子酒。

小唄　話し白けて　（本調子）

〽話し白けてゝ、ついつゝねんと、あけてくぜつの夏の月、なみだでゝしめるおしろいの、あれまたなくか、ほとゝぎす。

小唄　初雪に　（本調子）

〽初雪に降込められて向島二人が中に置炬燵ささの撥絃の爪弾は好いた同志の差向ひ嘘が浮世か浮世が実か誠くらべの胸と胸。

小唄　橋本　（本調子）

〽はし本へ、つけるや雪の、うかれ船、すだれかかげて二階から、望む男の面に、群雀。

小唄　二上り新内　（二上り）

〽悪留めせずとも、そこはなせ、明日の月日が、ないぢやなし、留めるそなたの心より、帰るゝ身が、どんなに、どんなに、つらからう。

小唄 惚れて通ふ（三下り）

〽惚れて通ふになにこはからう今宵も逢はうと闇の夜路を唯一人先やさほどにも思やせぬのにこちやのぼりつめえゝ〳〵山を越えて逢ひに行くどうした縁で彼の人に毎晩あうたら嬉しかろじつどうすりや添はれる縁ぢややらじれつたいよ。

端唄 ほとゝぎす（三下り）

〽時鳥、自由自在に聞く里は、酒屋へ三里豆腐屋へ、二里と云ふさうでも、粋な好いたお方と暮すなら、末は野末のこもだれに、身は捨て草の此の身体。

端唄 時鳥今一聲（本調子）

〽ほとゝぎすいまひとこゑのきかまほし、月はさゆれどすがたがみえぬ、ゑゝじれつたいなんとせう、ゑんきくさいぢやないかいな。

惚れさせて（二上り）「[illegible]の鳥」替唄

〽惚れさせて、今ぢや先から遠ざかる、切れる所存か、ええ、かまふもんか。

小唄 留めても帰る（本調子）

〽留めてもかへる、留めても、かへる〳〵の三ひよこひよこ、とんだ不首尾の、裏田圃、ふられついでの、エー、夜の雨。

小唄 どうぞかなへて （二上り）

へどうぞかなへてくださんせ、妙見さんへ願かけて、
帰るみちにもその人に、あひたいみたい恋しやと、
こつちばかりで先や知らぬ、ほんきらしいぢやないかいな。

端唄 りんきらしい （本調子）

へりんきらしいが、よう聞かしやんせ、愚痴に
なつたもおまへゆゑ、恋からしやんすな、わし
ぢやとて、なんのしー、言ひたいことはない。

小唄 主さんと （本調子）

へ主さんと、郷の浮名もたちやすく、風のうは
さも、うたてやつらや、流れの身こそ夜を花と、
比翼連理の二丁だち、とぼして雪の肌だ、
こひの習ひの心ふとし、切るといふ字はならやせぬ。

小唄 降りて行く （本調子）

へ降りてゆく花の盛りをあとに見て山をしやれ
よか船にしよかだいかいはこちやきらひ。

端唄 **大津絵**（二上り）

〽大阪を立ち退いて、私の姿が目に立たば、かりかごに身をやつし、奈良の旅籠や三輪の茶屋、五日三日と日を送り、二十日あまりに四十両、つかひ果して二分残る、金故大事の忠兵衛さん、科人にならしやんしたも皆私故、さぞやお腹も立ちませうが、因果づくじやとあきらめ下しやんせ。

端唄 **お互に**（本調子）

〽お互に知れぬが花よ世間の人に、知れりや互の身の詰まり、飽くまでお前に情立て、惚れたが無理かえしよんがいなまよふたが悪りかえ。

端唄 **お前と一生暮すなら**（本調子）

〽お前と一生暮すなら、深山の奥の侘住居、縫ひ針仕事糸車、細谷川の布さらし、柴刈る手業もいとやせぬ。

小唄 **男がようて**（三下り）

〽男がようて程もようて気がようて働き振もよけれども、浮気さんすが玉に瑕たしなましやんせ なんのいの 心のたまをいぞ。

お伊勢詣り（本調子）

〽お伊勢詣りに、石部の茶屋で、あつたときさア、可愛い長右衛門さんで、岩田帯しめたときさア。

お伊勢詣り（替唄）

〽お染久松野崎の宿にいったとき、駕と舟とで別れ〲まいったとき、「久作お光のすゝり泣き。

小唄　わしが在所（本調子）

〽わしが在所は京の田舎の片ほとり、八瀬や大原に牛曳いて柴打盤、床几頭へ一寸乗せて黒木買はしやんせんかいな黒木買はしやんせ、エヽエ、

端唄　我がもの（本調子）

〽我がものと思へばかろき傘の雪、恋の重荷を肩にかけ、いもがり行けば冬の夜の、川風寒く千鳥啼く、待つ身につらき置炬燵、実にやるせがないわいな。

端唄　私が國さ（二上り）

〽わしが國さで、見せたいものは、昔や谷風いま伊達模様ゆかし懐かし宮城野、信夫浮れまいぞへ松島ほとり、しよんがえ。

端唄　わしが思ひ（三下り）

〽わしが思ひは三國一よ富士の深山の白雪積りやするとも解けはせぬ、浮名立つかや、立つかや浮名今はうきなのたつのもうれし、人の心は相縁奇縁いッせつ命も遣る氣になつたわいな。

端唄　我が恋は（三下り）

へ我が恋は、住吉浦の春景色、たゞあをしとまつばかり、まつは憂いものつらいもの。

へ我が恋は、細谷川の丸木橋、渡るにやこはしわたらねば、おもふお方に逢はりやせぬ。

へ我が恋は、人こそ知らね冬の夜に、おもひ詰めたる胸の氷、解けてたのしむ下ごゝろ。

へ我が恋は、荒磯にかけし剃刀の、あひもせなや又切れもせず、蛇ぢやないぞえ生ごろし。

へ我が恋は、松島沖の夕景色、たゞあをしと松ばかり、これが恋やらなさけやら。

端唄　書き送る（本調子）

へ書き送る文もしどなき仮名書の抱いて寝よとのおきことそて岩に堰かれて散る波の雪かみぞれか霙か雪か解けて波路の二つ文字夫を恋しと慕ひて暮らすエ。

小唄　からくり（本調子）

へからくりのぱつと変りしお前の心かげで糸引く人がある。

小唄 からかさ（二上り）

へからかさの骨はばら〳〵紙や破れても離れ〳〵まいぞへ千鳥掛。

小唄 桂川（本調子）

へ桂川、お半をせなに長右衛門、肩にかけたる、ふり袖も、はや五月の岩田帯〆たが無理かえ。

小唄 兼て手管（本調子）

へ兼て手管と、わしゃ知りながら、くどき上手に、つい乗せられて、だまされて、さく室の梅。

小唄 肩車（本調子）

へ裸道中は彌次喜多でござる、川を越そとて肩車、ピヨコリ〳〵と肩車。

へ上ちゃ喜多八お馬でござる、歩け彌次さん、ハイヒードウ、ピヨコリ〳〵と肩車。

端唄 重ね扇（本調子）

へ重ね扇は、よい辻占よ、ふたり末つぼみたき柏、菊の花なら、いつまでも、活けて眺めてゐるこころ、色も香もある、梅の花。

端唄　川竹（本調子）

〽川竹の浮名を流す鳥さへも番ひ離れぬ鴛鴦の仲に立つ月すご〳〵と別れの辛さに袖しぼる、ホンに遣る瀬がないわいな。

端唄　蝙蝠（二上り）

〽蝙蝠が、出て来た浜の、夕涼み、川風さつと、ふく〳〵ぼたん、からい仕掛の色も男、いなさらぬ〳〵いつまでも浪花の水に、うつす姿え。

端唄　海晏寺（本調子）

〽アレ見やしやんせ海晏寺まゝよ龍田か高尾でも及びないぞへ紅葉がり。

替　唄

〽アレ見やしやんせ清玄は破れ衣に破れ笠、これも誰れ故さくらひめ。

替　唄

〽アレ待たしやんせ帰るならまゝよ浮名が立つとても帰さないぞへ此の雨に。

替　唄

〽アレ聞かしやんせ、虫の声、まゝよ松虫鈴虫と及ばないぞへ、主の声。

端唄 香水（本調子）

〽香水の薫ゆかしき鬢の毛を掻き上げしまゝ横櫛にさすや窓もる月の顔どれが女か男やらあかぬ姿の梅柳にくい仲ではないかいな。

小唄 籠の鳥（二上り）

〽籠の鳥、いでゝ羽ばたき、うれしげに、どこへ行かうし、えゝ、かまふもんか。

小唄 よりを戻して（本調子）

〽よりをもどして逢ふ氣はないか未練でいふのじやなけれども鳥も枯木に二度とゝまるちと逢ひたいね。

端唄 夜のあめ（二上り）

〽夜のあめ、もしや来るかと、たゝみざん、かみぞかへるのまじなひも、むしが知らせて、ともし火の、丁子が飛んだ今時分、氣まぐれさんすぬしのこゑ。

端唄　夜桜（三下り）

〽夜桜や、浮れ烏がまひ〳〵と、花の木蔭に誰やらが居るわいな、とぼけさんすな芽吹柳が、風にもまれて、ふうはり〳〵と、おささうぢやいな、さうぢやわいな。

端唄　宵にまち（本調子）

〽宵にまち、夜中にこがれ、明くる頃、せめて夢にとひぢまくら、アレ耳やかましい鳥のこゑ、ほんにきんきなこてぢやいな。

端唄　淀の川瀬（二上り）

〽淀の川瀬のなア景色を此所に引いて登るヤンレ三十石舟清き流れを汲む水車廻る間ごとはみな水馴れ棹さいたさかづきおさへてすけりや酔ぞ伏見へ下り巻き綱よかうした所が千両松ヨイ〳〵〳〵ヨイ〳〵〳〵〳〵〳〵。

小唄　手枕（三下り）

〽手枕や、お手々をながめの船の中、意気なお方のふたりづれ、やうすがいゝではないかいな、ほんにのんきな夕ざくら。

端唄 高砂（三下り）

〽高砂や、高砂や此浦舟に帆を擧げて、月諸共に出汐の浪の淡路の島影や、遠く鳴尾の沖過ぎて、早や住の江に着きにけり。早や住の江に着きにけり。

端唄 竹になりたや（二上り）

〽竹になりたや紫竹だけ元は尺八中は笛末はそもぢの筆の軸、思ひまゐらせ候かしくそれそれそうぢや〽。

端唄 玉川（本調子）

〽玉川の水に晒せし雪の肌、積る口説の其内に解けし島田のもつれ髪、思ひ出さずに忘れずにまた来る春を待つぞ〽。

端唄 竹に雀（本調子）

〽竹に雀は、品よくとまる、さしてとまらぬは色のみち、わたしばかりが情たてゝ、おもふおかたのつらにく〳〵や、ヨイ〳〵〳〵〳〵ヨイヤサ、それえ。

小唄　辰巳やよいとこ　（三下り）

〽辰巳やよいとこ、素足が歩く、羽織やお江戸のほこりもの、八幡鐘が鳴るはいな。

小唄　舘山節　（二上り）

〽浮世離れて奥山ずまゐ、恋も悋気も忘れてゐたが、鹿の啼く声聞きければ、昔が恋しうてならぬ。逢ひたさ見たさに来いやんす

小唄　空やひさしく　（本調子）

〽空やひさしくくもらるゝ　一中　降らるゝ雨も晴れやらぬ　消え　濡れて色ます青柳の、糸のもつれが氣にかゝる。

端唄　空ほの晴き　（本調子）

〽空ほの晴き東雲に、木の間がくれの時鳥、鬢のほつれをかき上げる、櫛の滴か、しづくが露か、ぬれて嬉しき、今朝のあめ。

端唄　綱は上意　（本調子）

〽綱は上意を蒙りて、羅生門へと来りける、折しも彼の烈しき後より、冑のしころ搔いつかみ、引戻さんと曳と引く綱も聞ゆる強者とて、かの曲者に諸手を掛け止しやれ放しやれしころが切れる、しころ切れるは厭ひはせぬが、たつた今結ふた鬢の毛が損じるは〳〵　七つ過ぎには行かねばならぬ、其所へ行かんすが此方や氣にかゝる　誰じやい〳〵　鬼じやないもの人じやものサツサ　冑もしころもどつちも要らネーサツサ　持つてけ背負つてけ。

端唄　辻君　（本調子）

〽辻君の、絶えぬ流れの思ひ川、恋には細る柳簪、暫しとめたき三日月の、櫛のむねさへ小夜風に、さらりと解けし洗ひ髪、結んで清き水の音。

端唄　露は尾花　（本調子）

〽露は尾花と寝たと云ふ、尾花は露と寝ぬと云ふ、あれ寝たといふ、寝ぬといふ尾花が穂に出て顕はれた。

小唄　月はさゆれど　（本調子）

〽月は冴ゆれど心はさえぬぢやないかいな　真に惚れては夜の目もあかぬいつそ浮氣がよいさ〳〵　これはのさえゝよいやさ。

小唄　寝ながらに　（本調子）

〽寝ながらにきかせるであける連子窓あれ見やしやんせあの雪に、鳥も塒を離れやせぬ。

小唄　涙かくして　（二上り）

〽涙かくして送りだす二階、座敷で見てゐたら一足づゝに遠くなるえゝも自烈體まがり角それ〳〵そうぢやいな。

小唄　無理な首尾（本調子）

〽無理な首尾して出先から用事をつけて
逢ふ夜さは枕も邪魔と引寄せて顔につめ
たき前髪の月ぢやごぜえせんしろじろと明烏。

端唄　むつとして（本調子）

〽勃然として帰れば門の青柳に、曇りし胸を春雨
にまた晴れて行く月の影、ならば朧にしてほしや。

端唄　宇治は茶所（本調子）

〽宇治は茶所さまざまに中に噂の大吉山と、人の気
に合ふ水に合ふ、色も香もある濡れた同志粋な
浮世に野暮らしいこちやしらい茶の中じやもの。

端唄　浮名立じと（本調子）

〽浮名立じと　口先で故とけなしてある時は
胸で惚けて知らぬ顔噂するさへならぬとはほん
にうるさい人の口。

端唄　うす墨（本調子）

〽うす墨に書く玉章の思ひして雁啼き渡る宵やみに、月影ならで主さんに、焦れて愚痴な畳算思ひ廻して儘ならぬ早く苦界を候かしく。

小唄　浮世離れて（二上り）

〽浮世離れて奥山住居恋も悋気も忘れてゐたが鹿の啼く聲きけば昔がこひしいわいな。

端唄　嘘とまこと（本調子）

〽嘘とまことの二瀬川、騙されぬ気で騙されて末は野となれ山となれ、私が思ひは君故ならば三又川の船の中心の丈けをおん察し。

端唄　梅にも春（本調子）

〽梅にも春の色添へて、若水汲むか車井の、音もせはしき鳥追ひや、朝日にしげき人影をもしやと思ふ恋の欲、遠音かぐらや数とりの、待つ辻うらや鼠なき、逢うて嬉しき笹機嫌。

小唄　浮氣同志（本調子）

〽浮氣同志がついかうなつてあゝでもないと四畳半湯のたぎるより音もなくあれ聞かしやんせ松の風。

小唄　梅は匂ひよ（本調子）

〽梅は匂ひよ木立はいらぬ人は心よ姿はいらぬ。

小唄　梅と松（本調子）

〽梅と松とや若竹の手に手引かれて七五三飾りならば嘘じやないぞえ穂俵は海老の腰とや千代までも共白髪よツ〳〵世の中、よい所ゆずり葉のでもマア明けましては目出度い春ぢやへ。

小唄　裏のせどや（本調子）

〽裏のせどやに、ちよいと竹うゑて〳〵、雀来るやうに、ちよいとたけうゑて、すゞめとまらかして、ちゆちゆらのちゆ〳〵。

小唄　梅は咲いたか（本調子）

〽梅は咲いたか桜はまだかいな柳やなよ〳〵風次第山吹や浮氣で色ばかりしよんがいな。

端唄　上り下り（本調子）

〽上り下りのお葛籠馬よさても見事な手綱染かいなア馬子衆の癖か高聲で鈴をたよりに小諸節坂は照る〳〵鈴鹿は曇る、あいの土山雨が降る。

小唄　雲にかけはし（本調子）

〽雲にかけはし、かすみに千鳥、およびないとて
惚れまいものか、ほれりや夜も日もないわいな、いつそ
頓間になつたさうな、ア、さうぢやいな。

端唄　口説して（本調子）

〽口説して思はせ振な空寝入奥の座敷の爪弾が
終ひ媒ちでそれなりに乱るゝ髪の柘の櫛八幡縫
の後朝に別れともなき送り舟。

小唄　草の葉（三下り）

〽草の葉にとまりし蝶は、二心、とかく菜の
葉も捨てられぬ。

端唄　槍は錆びても（本調子）

〽槍は錆びても名は錆びぬ、昔忘れぬ落し差
エ、さアさよいしよいしよいしよ　エ、さよいやさ。

小唄　野暮な屋敷（本調子）

〽野暮な屋敷の大小捨てて腰も身軽な町住居
よいしよいしよいしよ　よいやさ。

端唄　柳橋から（本調子）

〽柳橋から小舟で急がせ山谷堀土手の夜風がぞっと身にしむ衣紋坂君を思へば逢はぬ昔がましぞかしかた／＼今日は御座んせとさういう初音を聞きに来た。

端唄　八重一重（三下り）

〽八重一重、山も朧に薄化粧、娘盛りはよい桜花、嵐に散らで主さんに、逢ふて生中あと口惜む恥かしいではないかいな。

小唄　やくのは野暮（二上り）

〽やくのは野暮と知りながらあの忘られぬ甘口に餘所でもそれと胸の針嬉しがらせて罪ぢやぞえ。

小唄　待てと云ふなら（三下り）

〽まてといふなら五年はおろか柳新芽の枯れるまでとかく浮世は気散じなのほほんで暮しやんせ。

端唄　今朝の別れ（本調子）

〽今朝の別れに主の羽織がかくれんぼ雨があんなに降るわいなまあ遊みなましかた／＼と鳴く蛙。

小唄 筆のかさ（本調子）

〽筆のかさ、焚いて待つ夜のかやり火に、さつと吹きくるヱゝ涼風や、磯うつ汐もすねな夜に女なみ男なみのめをとなか、寝つかれぬ夜はなほ恋しさた、ねかさぬ時をおもひやる。

端唄 更けて逢ふ夜（本調子）

〽更けて逢ふ夜の氣苦勞は、人目をかねて格子先、互ひに見合はす顔とかほ、目にもつ涙袖濡れて、ヱゝ意地わるな火の用心はなす話し後や先。

小唄 船にせんどう（本調子）

〽船にせんどう、さゝやいて、今朝の出潮に首ッたけ惚れて通へば、千里も一里ぢやえ。

端唄 心でとめて（三下り）

〽心で留めて返す夜は、可愛いお方の爲にもなろと、泣いておかれて、またごげんもじ、ちよきの蒲團夜露に濡れてあとはもの憂き獨寝するも、こゝが苦界の眞中かいな。

端唄　紺の前かけ（三下り）

へ紺の前かけ松葉を染めて、まつにこんとは、気にかゝる。

端唄、御所車（二上り）

へ香に迷ふ梅が軒端ににほひ鳥、花に逢瀬を待つとせの、明けてうれしき懸想文、開くはつ音の、はづかしく、まだとけかぬる薄氷、雪におもひの、ふか草の、百夜も通ふ、恋の闇、君がなさけのかりねの床の、まくら片敷く、夜もすがら。

小唄、こぼれ松葉（本調子）

へこぼれ松葉はあやかりものよ枯れておちても女夫づれ。

端唄　恋し〳〵（本調子）

へ恋し〳〵が痞癪となり胸にさし込む窓の月、今に来るかと待つ身は知らで待たぬ一声ほとゝぎす。

今宵は雨（二下り）

へ今宵は雨か、月さへて、かさきていづるおぼろ夜に、ぬる、河岸の船のうち、杭にもやひし、首尾の松。

小唄　縁かいな（本調子）

〽夏の涼みは両国の、出舟入舟屋形舟、あがる流星、
星くだり、玉屋が取持つ、縁かいな。

小唄　海老の子（三下り）

〽海老の子は生れながらに髭長く、偶に梓の弓
を張り月は出月で目出度かりける次第なり。

小唄　青柳（二上り）

〽青柳の蔭に誰やらゐるわいな人ぢやござせん
おぼろ月夜の影法師。

端唄　秋の夜（本調子）

〽秋の夜は長いものとはまん丸な月見ぬ人の心かも
更けて待てども来ぬ人の音ずるものは鐘ばかり、
数ふる指も寝つ起きつ、わしや照らされて居るわいな。

端唄　浅くとも（本調子）

〽浅くとも清き流れのかきつばた、飛んで行き
来の濡れつばめ、のぞいて来たか編笠を、顔は
見たうはないかいな。

端唄　あごで知らせて（三下り）

〽腮で知らせて、目で受けて必らずやいのと約束したに、今に於いて今以て、首尾の間合もないことかエ、まゝならぬこそ、浮世、世の中、娑婆世界。

端唄　五月雨や（二上り）

〽五月雨や、空に一と声、ほとゝぎす、晴れて漕ぎ出す木母寺の、関屋はなれて綾瀬口、牛田の森を横に見て越ゆる間もなく堀切の、咲やごしやくのあやめぐさ。

端唄　五月雨に（本調子）

〽五月雨に池のまこもに水まして、いづれがあやめかきつばた、さだかにそれと吉原へ、ほどゝほからぬ水神の、離れ座敷の夕ぐれに、ちよつと見かはす富士筑波。

端唄　桜見よとて（三下り）

〽桜見よとて名を付けて、先づ朝桜、夕桜、よい夜桜や間夫の昼、どうぞこうなと首尾して逢はしやんせ、何時じやひけ過ぎじや、たそや行燈ちらりほらり鉄棒曳く。

端唄　咲いた桜（本調子）

〽咲いた桜の木に、コリヤ〳〵、駒の手綱をしつかと
ほどけぬやうに括り付け、駒がかゞりを振りや美
事にさいた桜の花が散る、美事に咲いた桜の葉
花散る、美事にさいた桜の花が散る。

〽咲いた桜に、なぜ駒つなぐ、大べらぼうな心なしぞ、ぞ
もつそこらまが勇めば、ソレハエ、花が散る。

小唄　薩摩サ（二上り）

〽薩摩サこりやサ薩摩と磯でおせど汐がサ
こりやサそこりで櫓が立たぬ。

小唄　山谷の小舟（本調子）

〽山谷の小舟ついた〳〵おゝついた待乳山風手拭
でしのぐ雨か霙か儘よ〳〵今夜もあしたの
げんも居続けせう生薑酒。

小唄　三下り

〽春風にそよしあがりし奴凧、骨が折れよが砕けよが、
ハーヤレコリヤ人のしやくりぢや切れはせぬ。

端唄　さんさ時雨　（三下り）

〽さんさ時雨か、萱屋の屋根か、音もせできて濡れかゝる志よんがいな、めでたい〳〵。

小唄　西行さん　（本調子）

〽西行さん初めて東へ下る時墨の衣に竹の杖唐茄子ほどな叩き鉦ちきちやんちきちき〳〵南無阿弥陀。

小唄　坂は照る〳〵　（本調子）

〽坂は照る〳〵鈴鹿は曇る間の土山雨が降る。

小唄　酒と女　（三下り）

〽酒と女は気の薬とかく浮世は色と酒さこちよいぴりつまんだ悪縁因縁南無まいだ〳〵地獄極楽〳〵ちよつと行くならば二人連れわしが嫁目ぢやなけれどもお前のやうなうつくしい殿子と地獄へ行くならば閻魔さんでも地蔵さんでもまだ〳〵〳〵鬼ころし。

端唄　京の四季（本調子）

〽春は花いざ見にごんせ東山、色香あらそふ夜桜や、浮かれ〳〵て、粋も不粋も物堅い二本ざしても柔かう祇園豆腐の二軒茶屋、みそぎぞ夏はうち連て、河原につどふ夕すゞみよい〳〵よい〳〵よいやサ、真葛が原にそよ〳〵と、秋ぞ色ます華頂山、時雨を厭ふ唐傘に濡れて紅葉の長楽寺、思ひぞ積もる円山に、今朝も来て見る雪見酒、ヱヽそして櫓のさし向ひよい〳〵よい〳〵よいやサ。

端唄　紀伊の国（本調子）

〽紀伊の国は、音無川の水上に、立たせ給ふは船玉山、船玉十二社大明神、さて東国に至りては、玉姫稲荷が三囲へ、狐の嫁入お荷物を、担ぐは強力いなり様、頼めば田町の袖摺が、差詰今宵は待女郎、仲人は真崎まつ黒な、九郎助稲荷につままれて、子まで生したる信田妻。

端唄　君は今頃（二上り）

〽君は今ごろ駒形あたり鳴いてあかせし山ほとゝぎす月の顔見りや思ひ出す。

小唄　伽羅のかほり（三下り）

〽伽羅の香とこの君様は幾夜とめてもわしやとめあかぬ寝てもさめても忘られぬ。

端唄　夕暮（本調子）

〽夕暮に眺め見あかぬ隅田川、月に風情を待乳山、帆かけた船が見ゆるぞへ、アレ鳥が啼く鳥の名も、みやこに名所があるわいナ。

小唄　雪のあした（本調子）

〽雪のあした、あさぼらけ、浪花の浦の松帆かたほ、ゆきゝの船で、たよりする、わたしやかゝりしてゐるわいな。

端唄　夕立（三下り）

〽夕立や田をみめぐりの神ならば葛西太郎の洗ひ鯉さらが嵩じて狐拳ほんに全盛なことぢやいな堀の舟や竹屋の人と呼子鳥。

端唄　弓張月（本調子）

〽弓張月の、かげくらく、かよふふりして忍んで行けば、おきつしらなみたつた山、夜半には君がひとりこゆらむ。

小唄　雪の達磨（二上り）

〽雪の達磨に炭団の眼鼻解けて流るゝ墨衣。

小唄　雪は巴（本調子）

〽雪はともゑに降りしきる、屏風が恋の中だちで、蝶と千鳥の三ツ布団、元木に帰る鴛鴦、まだ口青いぢやないかいな。

小唄　雪のあした（本調子）「お伊勢詣り」替唄

〽雪のあしたの、両国橋、詠んだときさア、歌で源吾の、ほんとの心が、知れたときさア、あした待たるゝ宝船。

小唄 **夕立** （三下り）「三日月」替唄

〽夕立の、あまり強さに、一寸雨やどり、傘をかりようか、このまゝ行かうか、まゝよこのまゝ、ぬれてゆこう。

端唄 **めぐる日** （本調子）

〽めぐる日の春に近いとて老木の梅も若やぎてそれしほらしや薫り床しと待ち侘顔ぞ、さゝ鳴きかける鶯の来ては朝寝を起しけりさりとは気短な今帯締めて行くわいなほうほけきやうといふ人さんぢや。

小唄 **三日月** （三下り）

〽三日月の光り出ぬ間にちよとかけいだす恋の習ひか人目が邪魔か曲る横丁の柳蔭。

三日月 （替唄）

〽夕立の、あまり強さに、一寸かけいだす傘をかりようか、晴れまを待とうか、まゝよこのまゝぬれて行く。

小唄 **三千歳** （本調子）

〽一日逢はねば千日の思ひもつもる春の夜の静かに更けて冴えかへる、寒さをかこふ袖屏風入谷の寮の睦言も、淡き灯影に波うたす、隙間をもるゝ雪おろし。

端唄　志賀の唐崎（本調子）

〽志賀の唐崎ひとつ松夜毎々々に、泊り烏が群れ来るを、阿呆々々と嬉し涙の乾く間も、曇りがちなる夜の雨。

端唄　忍ぶ恋路（本調子）

〽忍ぶ恋路は、さてはかなさよ、今度逢ふのが命がけよごす涙のおしろいも、その顔かくす無理な酒。

小唄　びんのほつれ（三下り）

〽びんのほつれは枕のとがよそれをお前にうたぐられ勤めぢやえゝ苦界ぢやゆるしやんせ。

小唄　ぴんとすねては（本調子）

〽ぴんとすねてはまた笑ひがほ苦労させたり泣かせたり色の世の中苦の世界。

小唄　せかれ〳〵て（本調子）

〽せかれ〳〵てよく〳〵暮すえ　たまに逢ふ夜はせかれては逢ひあふてはせかれ別れともない明の鐘。

端唄　粋な浮世（本調子）

〽粋な浮世を恋故に野暮に暮らすも心から、梅が香添ゆる春風に二枚屏風を押隔て朧月夜の薄明り忍び忍んで相惚れの口説は床の涙雨池の蛙も夜もすがらしんに泣いてはないかいな。

端唄　好いた同志（本調子）

〽好いた同志が、つい斯うなって、あてでもないと四畳半、湯のたぎるより音もなく、アレ聞きかしゃんせ、松の風。

昭和十四年四月二十日印刷
昭和十四年五月十日発行
発行兼編輯人　東京市麹町区内幸町一丁目東拓ビル　川添利基
印刷人　鈴木鶴郎
印刷所　東京市芝区新堀河岸二十九番地　三和印刷所
発行所　神奈川県川崎市久根崎一二五番地　株式会社日本蓄音器商会

389
158

終